

機関番号：12601
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520318
 研究課題名（和文） 現代中国における審美主義

研究課題名（英文） Aestheticism in Modern China

研究代表者 伊藤徳也
 （ITO NORIYA）
 東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
 研究者番号：10213068

研究成果の概要（和文）：

周作人を代表とする現代中国学院派の審美主義は、深奥な構造を備えており、現代社会、特に現代中国社会の生活と芸術との間の様々な審美関係に対する有効な分析枠組みを提供することができる。

研究成果の概要（英文）：

Aestheticism that Zhou Zuoren and other academicians constituted in 1920-40's has a profound and wide structure behind it. From it, we can extract useful perspectives which analyze various aesthetic relationships between life and art in modern society, especially in modern Chinese society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学 比較文学

1. 研究開始当初の背景

従来、現代中国において審美主義は思潮として主流を成さなかったと考えられてきたが、解志熙『美の偏至－中国現代唯美・頹廢文学思潮研究』（上海文芸出版社、1997年）は、中国の現代文学史において審美主義が、幅広く隠微な形であれ遍在し

ていたことを説得的に示し、周小儀『唯美主義と消費文化』（北京大学出版社、2002年）は文芸思潮だけでなく、人生観や生活態度にも審美主義が深く浸透していたことを指摘した。しかし、両者とも、批判的に現代中国の審美主義の一面を描くにとどまり、その構造・様態の立体性や流動性、

方向性等に対する本格的な解明はなされなかった。

解著は、周作人が先導した学院的で深奥な審美主義を、社会功利主義の観点からその否定面のみを強調して描いたため、学院派審美主義の現代的意義や、社会的肯定面への分析を欠落させた。その欠を補ったのが、周仁政『京派文学与現代文化』（湖南師範大学出版社、2002年）だが、周著は、後期京派の朱光潜と沈從文を中心に論じたために、そもそも中国の学院派審美主義の源流でかつ中心的存在であったはずの周作人の美学に対する分析が、極めて表面的なものになり、結局、中国の学院派審美主義全体の解明から遠ざかる結果となった。

一方、近年の中国においては、学院派の深奥な審美主義は主に美学者によって継承されたが、社会的には、視聴覚偏重の大衆的な消費型審美主義が広範で強大な影響力を持つようになって、両者の間の矛盾・対立がこれまでになく強く意識されるようになっていた。

2. 研究の目的

(1) 審美主義を中心に、激動する現代中国の底流に流れる感性と芸術観（広義）を把握し、その中から一定の普遍性を持ちうる価値を抽出するとともに、固有価値の中国社会内で発揮される固有の機能を記述すること。

(2) 現代中国社会に適合した良質の分析枠組みを創造すること。

(3) 分析枠組みの最良の土台になり得る周作人の審美主義の構造と様態、機能を説明すること。

3. 研究の方法

(1) 諸文献に対する歴史的調査・研究およびテキスト分析を基本的な方法とした。

(2) 周作人研究から導き出された研究結果をもとに、分析ポイントを設定し、同時に、他の事象の研究調査結果を付き合わせることによって、周作人研究を基礎に置いた当初の分析枠組を微調整していった。

(3) 中国における昨今の状況に関しては、インタビューやフィールドワークを取り入れた。

4. 研究成果

(1) 現代中国における芸術観の普遍性と固有性を確認した。

①現代中国における「芸術」は、英語、フランス語の“art”同様、広義には「技術」「技法」としての意味を備える。（現代日本は美術と音楽以外の形式を芸術と呼ぶことが圧倒的に少ない）

②現代中国における「美」は、欧米同様、視聴覚の官能的快感を中心としつつ、政治的・道徳的正義を含み持つ。（現代日本の「美」は相対的に政治性、道徳性が薄弱）

(2) 「審美主義」を新たに定義付けた。

①「審美主義」という用語を「唯美主義」「耽美主義」と比較吟味し、文芸だけではなく人生観もカバーする概念として改めて規定した。

②「無用の用」のような異なる審級を構造的に抱える美学を「審美主義」の中核に位置づけた。

③「デカダンス」を自己目的自律性を求める審美的傾向、あるいは、部分を全体化しようとする態度と定義づけた。

④モダニティ（現代性）の二面（道具理性

と美的耽溺)ともに細部にはデカダンスが浸透しており、審美主義の解明がモダニティの解明につながることを指摘した。

(3) 周作人におけるデカダンス(頽廢)概念の由来とその展開の様相を明らかにした。

①1921年にボードレールに注目、『巴里の憂鬱』を翻訳し、頽廢派の「生への意志」に共鳴したあと、1923年、H・エリス「ユイスマンス」(『断言』所収)の議論によって、デカダンス概念を原理的に理解し、自分のものとした。

②デカダンス概念を中国社会史・文芸史に適用し、時代とともに優勢な文芸のタイプも変化するというユニークな中国文芸史観を形成した。

③彼の文芸史観は最終的に「言志」派と「載道」派の起伏消長としてまとめられたが、実は、「言志」派とは頽廢派の別名であり、「載道」派とは革命文学派(文学功利主義)の別名であった。

④デカダンスは「芸術のための芸術」(「科学のための科学」)のような自己目的のローガンによって先導されるが、それは、自律的發展に向かうという意味で、専門化、分業化の別名でもあることが理解されていた。彼は大卒で専門化、分業化を肯定したうえで、統合性を失い生活感覚から乖離していく専門技術と人間(生活)とを結びつける装置として「常識」を用意した。

⑤生活のデカダンス、つまり、自己目的的な生活(生きるために生きる、生活のための生活)の価値を認め、社会的にそれを保護しようとした。したがって、「死の賛美」(何かのために生命を投げ出すことを賛美する)を批判し、本能的欲求を充足させる食欲や性欲を肯定しつつ、充足までの過程をできるだけ遅延させる節制の意義と機能(更に深い快

楽の実現)を力説した。

(4) 周作人の中心的テーゼ「生活の芸術」論の構造と機能そしてその主体の様態を解明した。

①「芸術のための芸術」と「人生のための芸術」の矛盾を、「人生の芸術」という形で取りまとめて、「人生」「芸術」双方の深化・発展を追求したが、やがて、直線的で垂直的な「人生」概念を、複雑煩瑣で水平的な「生活」概念に置き換えて、「生活の芸術」論を提唱するようになった。

②「芸術のための芸術」を肯定するとともに、「生活のための生活」を肯定する、達人的な技法が「生活の芸術」であった。両者とも相対的な方向性であって、それぞれが個別に徹底されたわけではなく、両者のバランスをとるのが「中庸」あるいは「趣味」という絶対的な価値基準であった。

③「生活の芸術」は個人主義を基本にしていたが、個人を基にした野放図な自由競争を、を逆に批判した。それは、誰かが犠牲になるからである。誰かが犠牲になる社会は、人間にとって「不自然」な状態であって、可能な限り、誰もが生命や身体を何かの犠牲にせずにすることを、「生活の芸術」の最低限の倫理として要求した。

④「生活の芸術」の主体は、特別なものを持った「英雄」や「天才」、「専門家」「仙人」「聖人」ではなく、「凡人」が想定された。「凡人」はまた「叛徒」でもなく「隠士」でもない。「生活の芸術」の主体としてよりよい主体は、現実社会の隅々まで観照し味わう主体であるとされた。そのような行為を周作人は「知」と呼び、それを現実に対する積極性として認識した。また、各領域のデカダンスを深化させる各専門家とは、「常識」を媒介として、実証的につながっているとされた。

(5) 社会における審美主義の様相を分析する分析枠組みのポイントを整理した。

①デカダンス（自己目的自律性が追求されているか否か）

②デカダンスの追求の際、「無用の用」風のメタレベルでの功利性が意識されているか、表明されているかいないか、どのようにそれが隠蔽されているか。

③厳格に基本的倫理が設定されているか否か（社会倫理、社会的公平性がどれだけ加味されているか、どれだけ追求されているか）

④快樂の追求は、視聴覚に偏っていないか、第六感（共通感覚）まで考慮されているか否か。

⑤どのような審美主体と審美対象との間の審美関係が想定されているか。

(6) 近年の消費社会中国の大衆的審美主義の進展・増強をめぐる社会的矛盾・対立の様相を概括した。

①消費型審美主義に対する学院派の態度は、超越的批判と認知的批判に大きく分かれる。超越的批判は主に美学者、認知的批判は主にカルチュラル・スタディ研究者によってなされている。ただし、徐々に、認知的な態度が優勢を占めるようになっている。

②現代アートの芸術家は、積極的に大衆的な消費型審美主義を取り入れ、利用あるいは逆用して、社会的なインパクトを強めようとする傾向が強い。

③都市エリートは大衆的な消費型審美主義を肯定しながら、それを維持するために、次々と審美対象を新しいものに取替えている。その中から、一定程度の深度を備えた新しい消費型審美主義が生まれつつあるように見える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

①伊藤徳也、啓蒙主義的現代儒家、かつ中国式頹廢派—周作人における「凡人」と「生活の芸術」、東洋文化研究所紀要、査読無、第159冊、2011、pp.1-38

②伊藤徳也、倫理の自然-周作人における「生活の芸術」と性道德、超域文化科学紀要、査読無、第15号、2010、pp.5-22

③伊藤徳也、生活のための生活-周作人における「生活の芸術」、東洋文化研究所紀要、査読無、第155冊、2009、pp.61-92

④伊藤徳也、審美価値としての「苦」—周作人における「生活の芸術」、現代中国、査読有、82号、2008、pp.131-141

〔学会発表〕（計1件）

佐藤普美子、民国期の詩学課題—芸術と実生活、伝統と西洋詩学、東京現代中国文学研究会、2010年3月8日、東京大学

〔図書〕（計1件）

佐藤普美子、汲古書院、彼此往来の詩学：馮至と中国現代詩学、2011、388頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等 無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 徳也 (ITO NORIYA)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：10213068

(2)連携研究者

佐藤 普美子 (SATO FUMIKO)
駒澤大学・総合教育研究部・教授
研究者番号：60119427

白井 啓介 (SHIRAI KEISUKE)
文教大学・文学部・教授
研究者番号：40154348